
佐助OffDay

右往左往

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐助OffDay

【Nコード】

N5008Z

【作者名】

右往左往

【あらすじ】

佐助の休暇を勝手に想像して書いてみました。

（前書き）

初投稿です！！

未熟な作者が書いていますので、広い心であまり期待せず読んでください。

「ああ、全く嫌んなっちゃうよ、全く。ハア」 (、)、;

、

木の上で溜め息をつき、影が絵になる俺様、猿飛佐助 (* ^ m ^ *)
俺様を悩ましてくれちゃってんのは、俺様の主の真田の旦那。

そして旦那は、今、休暇です。休暇ですッ (- - - #)

俺様も、昨日武田の大將に休暇もらったはずなのに、はずなのにッ、
木の上ッ (; | ;)

まあ、旦那が何かしでかすよりマシかあ。

奥州行く気ですよ、旦那はッ (- - - ;)

そもその始まりは、俺様が何か月ぶりかの休暇で外に買い物に出
たとき。

休暇のはずの旦那が愛用の槍を持って、愛用の馬にまたがって東北
に向かうのを見ちゃったから (o - -) b

今は戦中の所はないはずだし、だから休暇なんだし、つまり、伊達
の竜の旦那と手合わせ…ってというのが、ピーンと賢い俺様にはわか
っちゃったわけで、わかっちゃったからには、放っておけないわけ
で、今にいたる (; ;)

俺様、今、私服なのに…。

ちなみに、額あてと化粧は無しで、薄緑の和服、帯は黒、羽織は黒
緑の渋いかんじ。

俺様なかなか (- +)

だから、正直、動きにくいんだよねえ (^ | ^ ;)

あつ、旦那、甘味屋に入った。

いいなあ、俺様も、団子食べようかなあ (^ ^ ;)

旦那に金銭管理させないようにしよう。旦那の給料の使い道…、
んだけ甘味屋で使ってんだろ（＾―＾；）

あつ…、品書き二週目突入してる（。；）

しかしまあ、腹が減っては戦はできぬって言うけどねえ…。

旦那の胃袋はどうなってるんだろ…（・・；）

さてと、俺様どうしよっかなあ。

しばらく、旦那は食べてるだろうし、奥州に先回りでもして右目の
旦那に会つところかねえ。

そうすりゃ、竜の旦那は右目の旦那が止めてくれるだろうし。

そいじゃ、行きますか。

無音の口笛を吹き、黒い巨鳥をよぶ。

「奥州近くまで、よろしくね」

おつ、いたいた！

ここは、勝手知つたる竜の旦那の屋敷。

そして、俺様は右目の旦那の部屋の天井上にいます。

「そこにいるのはわかってる。出てこい」

「あははあ、バレてた？俺様、忍なんだけどねえ」

「たりまえだ。いったい何のようだ、……………珍しい格好してんな」

「あははあ、今回はお忍びなの、忍のお忍びなんちゃって」

「……………」

「嫌だなあ、旦那黙らないでよ（＾―＾；）」

「…それで、何のようだ」

「そうそう、旦那に頼みがあってね。竜の旦那のことで
「いったいどういことだ…」

いきなり右目の旦那の眉間に皺がよる。

「いやあね、うちの旦那がこつち向かってたからね。多分、竜の
旦那とまた手合わせしようとしてんじゃないかってね」

「はあ。それで、なんで、政宗様でなく俺の方に…」

「だって、竜の旦那相手しそっじゃない。こつちもそつちも戦前の
大事なときに怪我したら面倒ごとが増えるでしょ（…）」

「まあ、それで俺か」

「そーいうこと（*^|^*）ってことでお願いしていい」

「まあ、今回は政宗様に怪我されたら大変だしな。政宗様は俺が何
とかしよう。だが…」

「アハハ…。聞かれたね（o ;）」

「政宗様、出ていらしてください」

「Han、さすがに気付かれたか」

声と共に普段着の竜の旦那が部屋に入ってくる。

「こちとら、そういうことが本業だからねえ（^|^ ;）」

「政宗様、お聞きになっていたなら、おわかりですね」

「Han！当たり前じゃないか小十郎」

「悪いねえ」

「気にすんな。戦前に腕試しができて丁度いいじゃねえか」

「政宗様！！」「竜の旦那あ！」

「ん、どうした？小十郎にMonkey：ぬわっ！」

一瞬で間合いを詰めた右目の旦那が説教モードに入る。

「政宗様、あなたという方は…途中から話を聞いていなかったでし
よう！」

「聞いてたぜつ…、真田幸村が来るんだろ」

「そこから、一騎討ちのことを考えておられたんですね」

「ありゃ、竜の旦那もやる気満々？」

「なっ、駄目なのか！」

「当たり前です、政宗様」

「そう言うこと、旦那が来たら追いついてね」(^ | ^ ;)

「わかりましたね、政宗様」

「Ok、ちよつと外に出て来るな、小十郎」

「政宗様、まさかとは思いますが、真田幸村を探しに行く気ではありませんね」

「あつあたりまえだぜ、小十郎」

「そうですか、でわ、外ではなくお部屋で書類を片付けてください」

「Ok、Ok。わーたよ。そいじゃなMonkey。See you」

「悪いねえ(^ | ^ ;)さいなら」

竜の旦那が出ていく。なんか俺様面倒事が起きそうな気がする…。右目の旦那を見ると、眉間にしわがよってる。

「そちらも、大変そうだねえ」(; ;)

「まったくだ。まあ、政宗様は、俺が何とかしよう」

「悪いねえ(^ | ^ ;)どこも同じようなもんなんだねえ」

鎧を着込み、六本の刀を装備した影が辺りを気にしながら屋敷を出ようとしている。

ふうう…。

なんとか、小十郎に見つからずに屋敷を出られたぜ。

待ってるよ、真田幸村ア！！！！

「来ないねえ、うちの旦那」

時刻はもう夕食どき、甘味処から奥州にいい加減ついてもいいはずである。

「来ると決まった訳じゃないだろ。こちらにしたら来ないでいてくれた方が助かるしな」

「そうだねえ、そういえば、右目の旦那あ、竜の旦那の気配が無いけどいいの？」

「ああ……ああ！？いつからだ猿飛！」

「えっと、部屋を出ていったくらいかな」

「きつと、真田幸村を探しにいったんだろう」

「大変だねえ（　〇　；　）」

「お前も手伝え！本気になる前に止めねえと被害がでかくなる」

「そうだねえ、うちの旦那にけがされても困るし、行きますか」

現れねえ。こんだけ目立つように城下町を歩いてんのに現れねえ。

「もしや、森ん中をきてんじゃ、きつとそうだ。よし、森に向かうぜ！今いくぜ、真田幸村ア！」

「ありやりやあゝ、竜の旦那も、真田の旦那も見つかんないよゝ、まったく（　ゝゝゝ　；　）」

「とは言え、まだ戦い出してはいないみたいだねえ。」

戦い出してたら火柱とか落雷とかとかで、すぐわかるだろうし（＾―＾；）

「…と…お…うこん…ぜっ…しょお…う…！！！！」

この半端なく遠いのにわかつちゃう熱すぎる声は…。

「あちゃあ、真田の旦那だね、こりゃ、竜の旦那に聞こえてなきやいいけど…。まあ、俺様が先に旦那を回収すりゃいいか（＾―＾；）」

佐助が真田幸村の声をたよりに向かう先は…。

ピクッ！

野生の勘がなせる技なのか、好敵手と認めあっているからなのか、ただ単に幸村の声がでかいのかはわからないが…、政宗は幸村の存在に気づいた。それは、森の奥深くにいる己とは、正反対の場所、城下町だった…。

Shit！もつと先まで行くべきだったぜ…！
すぐに向かうぜYahaa！！

「筆頭…？筆頭なら森にとばしてやしたが…」

「そうか、見つけ次第俺に連絡するんだ」

「わかりやした」

政宗様は森か、なんとしてでも止めねえと。

来る、絶対来る！チイツ！バレたか！般若みてーなオーラ…小十郎、相当怒ってやがんな。

ヒイイン

馬の鳴き声と共に小十郎が政宗の前に現れる。

「政宗様！」

「…どうした、小十郎？そんなに、慌ててやり過ごせるか…。」

「どうしたではないでしょう！勝手に屋敷を抜け出して！」

「んなつ、小十郎、俺はいちいちお前に外に出るのを伝えなきゃならない歳じゃないぜ」
「いけるか…。」

「そうでございますが、政宗様。あなたは、ここ奥州の一国の主です。ご自覚なさってください」
「いけ…。」

「それに！その姿、真田幸村を探していたのですね」
「いけ…なかった！Out！」

「Ok、Ok。屋敷に戻るぜ、小十郎」
だが、城下町に馬を向ける。

俺は、まだ、諦めた訳じゃないぜ、真田幸村ア！！！！
妙に素直な主の隠せていない気合いと策略を感じつつ、ため息と共に政宗について行く小十郎でありました。

「だ、ん、なつ（ー＋）」

「ぬをつ、佐助！お主こんなところで何をしておる」

ここは、奥州の城下町にある一軒の甘味処である。そして、口に小豆を付けつつ驚いているのが、佐助と政宗が探していた、真田幸村である。

「それは、こっちの台詞だよ、旦那。俺様は、旦那追ってきたの（
ーハハハ）」

「何故、それがしを追ってきたのだ」

「何故ってえ、休みの日に戦装束きっちり身に付けて、双槍背負って、愛馬にまたがって、東北に向かって走る主がいたら追いかけるのが普通でしょおが（＃＊、＊）」

「なぬっ、もしや佐助、それがしが政宗殿と一騎討ちしようとしていると思っておるのか」

「それ以外にないでしょおが（＃＊、＊）」

「全く、佐助は心配性であるな、だが佐助、早とちりは良くないでござるよ」

「じゃあ、なんのために奥州に来てるの旦那（？ー？）」

「ふっ…」

幸村が指す先には、…大盛り早食いの広告が。

「まさか（。。；；）」

「そうでござる、佐助これが目的でござるよ」

「じゃっ、なんで戦装束きっちり着こんで、双槍横に置いてあんの（。。；；）」

「やはり魂を燃やすためには、この格好で槍を持たねば…、

闘魂絶唱ッッ！」

咆哮と共に猛烈な勢いで旦那の姿を隠しているあんみつを胃に収める様子を見て…、なんか俺様、気が遠くなってきた…。

「！どうしたのだ、佐助！」

「なんでもないよ、旦那…。…おばちゃん、普通の団子一皿」

乾いた笑いと一緒に、ここは何が美味しいとか何ともしばけた幸せ

そうな旦那の横に座る。

空は、夕暮れ。

ああゝあ、休日、無駄にしちゃった… (ゝゝゝゝゝゝ)

しばらくして、竜と右目の旦那が甘味処にやって来て、俺様同様脱力してた。ご迷惑おかけしました(ゝゝゝゝゝゝ)

んで、収まりきらない竜の旦那が、うちの旦那と大食い勝負して、負けた上に右目の旦那に怒られて帰ってった。

右目の旦那も大変だねえ。

今、旦那と甲斐に帰ってるんだけど、謎があるんだよねえ(・ゝゝゝゝゝゝ)

旦那、どんだけ、食ってんの(ゝゝゝゝゝゝ)

確か、奥州に来る前も品書き二週してたし、俺様に会うまでも食べてたらしいし、俺様とあってからも凄い勢いで食べてたし、その後も竜の旦那がダウンするくらいそのあとで食べてたし……………怖っ

(ゝゝゝゝゝゝ)

別腹の域を余裕で飛び越えてる…。

甘党とは、知っていたけど、旦那の胃袋恐るべし！

今回は旦那の新たな一面を発見した休日だった(ゝゝゝゝゝゝ)

まあ、それなりに平和で良かったけどね(＊ゝゝゝゝゝゝ＊)

真田幸村ア、大食いでも勝つ!!!!!!
Next Challenge!!!!!!

えっ、旦那、まだ甘味処寄るの…？

政宗は、幸村に勝てる日はくるのだろうか…。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます！！
誤字脱字おかしな表現等がありましたら教えてほしいです。
感想など書いてもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5008z/>

佐助OffDay

2011年12月16日23時45分発行